

1. 「農業農村開発の技術」とは何か、を考える

(ア) そもそも「農業農村」という単語は存在せず、唯一「農業農村工学」の HP に記載があるのみ（以下参照）

① 農業農村工学の目的

➡農業の生産性向上、農村の生活環境の整備、農業農村にかかわる中小都市も含めた地域全体の持続的発展

② 農業農村工学はつまりどういうものなのか

➡「循環」を基調とした社会を構築し、水・土などの地域資源を、人と自然の調和、環境への配慮を重視して、合理的に管理する科学技術

※結局は、「農業」と「農村」を単純に繋げた言葉。∴「農業開発」と「農村開発」との 2 つに展開して考えるのが適切。

(イ) 「技術」と「工学」の違いから言えること

① 「技術」＝自然に人為を加えて人間の生活に役立てるようにする手段そのもの。

② 「工学」＝科学知識を応用して、ある物を作り出したり、ある事を実現させたりするための方法・システムなどを研究する学問。

∴「農業農村開発の技術」は、**農業および農村を開発するための手段**と定義され、「農業農村（開発）工学」は、**農業および農村を開発するための方法・システムなどを研究する学問**と定義づけできる。

(ウ) 農業農村の人々の「本音」を知る重要性

・「農業農村開発の技術とは何か」＝「農業を営む人々、あるいは農村に住む人々の生活に役立つような手段とは何か」を考える際は、相手の**本音や真のニーズ**を掴む必要がある

・技術者は、農業農村の生活者が抱える課題を正しく理解し、相手の役に立つ手段を提供する責任がある

2. 日本の農業農村開発の変遷を理解した上で、海外の農業農村社会に技術普及する際の「速度」を考える

(ア) 日本が辿ってきた農業農村開発の歴史（農業機械・速すぎる技術革新/技術普及による変化）

【元々】結をベースとした共同労働、人々の交流、農家のマルチタスク性➡

【技術普及後】共同労働/農業の崩壊、農家の専門化、後継者不足、耕作放棄地の増加 等

※確かに技術革新は人々の生活を楽にしたが、**失われたものも多い**（上記+環境負荷や社会の混乱など）

(イ) 東南アジア各国の現状

農業機械化前夜の日本の農村の雰囲気、対象国にも農業農村開発において既存技術が存在する（ローテクなものも含め）

➡日本の歩んできた農業農村開発の歴史や、技術普及の結果と現状を踏まえ、**海外での技術普及の妥当性**

（新技術を導入することでどんな変化が起きるか、そもそも必要なのか、どんな結果がもたらされそうか、導入後本当に人々に根付くのか）を用意周到に検討する必要がある。

3. おわりに

農業農村開発の技術者は、対象とする「農業農村社会の本音」と「適用可能な技術」との**両方**を知っている必要がある。また、細分化されてしまった**農学全分野の最低限の技術**に通じていなければならない。そのような技術者の育成は確かに難しいが、対象地域のニーズの把握と、必要とされる技術習得を達成できる若者の輩出が急務である。